

まえがき

本スタイルガイドは日本化学会の速報誌 *Chemistry Letters* に論文を投稿するに際して、注意すべき事項や英語の知識をまとめたものである。

米式英語によって、文法上誤りがなく、化学用語が正しく使用された原稿を提出せよと言うだけでは、具体的にどうすればよいかが、著者に明らかであるとは言い難い。日本化学会の立場から見た原稿の完成には、欧文誌、速報誌両編集委員会の議を経た『投稿規則・投稿の手引』の参照が不可欠である。しかし、小冊子であり、長らく改定されていないこともあって、十分な情報は得られない。手近な論文誌を参照すると、米式か、英式かだけで、綴りのみならず、字体、コンマ、ハイフン、記号の使用にも、かなりの差異がある。さらに、論文誌ごとのスタイルの差異がこれにつけ加わる。日本化学会刊行の書籍、例えば『学術用語集』を参照して化学用語におけるハイフンの有無を知ろうとしても、必ずしも掲載されていない。有力な手段として、米国化学会発行の分厚い *The ACS Style Guide* を参考にすることが考えられる。しかし、日本化学会の『投稿規則・投稿の手引』や刊行物を無視して、全面的に *The ACS Style Guide* に頼ることはできない。記号「～」一つを取り上げても、『化学便覧基礎編』に記載されている国際的取り決めに従った用法は、*The ACS Style Guide* 記載の用法とはまったく異なる。したがって、日本化学会においても、原稿を作成するのに必要な事項を説明した解説書が存在することが望ましい。この要望にこたえて企画されたのが、速報誌の現状をまとめ、解説と例文を付した本スタイルガイドである。現在、速報誌のスタイルと欧文誌のスタイルには、『投稿規定・投稿の手引き』からも知れるように、多少の形式上の相違はあるが、それらは化学会学術情報部で整える範囲内にあるから、欧文誌に投稿する著者にも、本書は十分に役立つものである。

The ACS Style Guide は数少ない章から成り立ち、区分けが大きくて、必要な箇所を見出すのが容易でなく、索引を見ると何ヵ所にも分散していることが、しばしばである。そこで、本書は慣用法辞典 *Usage* の形式を採用して、索引の項目程度に区分けを小さくするとともに、各項目に関連することは、多

少は重複しても一括して記載することによって、必要な事項に容易に到達できるよう心掛けた。日本人向けの本書には、The ACS Style Guide よりも数多くの英文に関する注意事項を取り上げ、文法にふれた詳しい解説がなされている。多数の例文は後述のように本書独自のものである。

本文は英語の見出しとしてABC順に配列されているので、必要な項目を英語で直接参照することができるが、内容的な体系性は有していない。また、もとより英和辞典ではないので、多くの注意すべき表現を挙げているとはいえ、実際にどれが存在するかは見えにくい。そこで、日本語からのアプローチも可能にする目的に併せて、索引の主見出しと副見出し（説明句）を設け、本文中の数箇所ですべて述べられている関連事項がまとまって探せるように工夫した。また必要に応じて同一の項目につき主見出しと副見出しを逆転させ二重に設定しているので、どちらからでも関連事項にたどり着ける。さらに索引全体にある程度の体系性を持たせ、説明箇所の構成や分量を見渡せるように努めた。

なお、本書は日本化学会学術情報部のご諒承をえて、化学会監修として出版されることとなった。特に檜山為次郎速報誌編集委員長、玉尾皓平欧文誌編集委員長には本書の出版にあたりご理解とご支援を頂いた。ここに厚くお礼申し上げます。また本書の企画立ち上げから出版まで、関係者間の調整を引き受けられた林和弘化学会学術情報部課長にも謝意を表す。

平素ともに仕事をしている荒木啓介、大橋守両顧問には、原稿について種々のご助言を頂いた。詳細な索引は荒木啓介顧問が使用者の便宜を考慮して、工夫し作成されたものである。両顧問のご協力に深く感謝する。また、刊行に当たって大変お世話になった朝倉書店編集部の方々に厚くお礼を申し上げます。

2005年12月

速報誌製作顧問 松永義夫